

群 教 セ	H01 - 01
	平 27.257 集
	幼児教育

友達と思いや考えを伝え合い、互いに認め合う幼児の育成

— 幼児の思いや考えを “見える化” することを通して —

特別研修員 大淵 光規

I 研究テーマ設定の理由

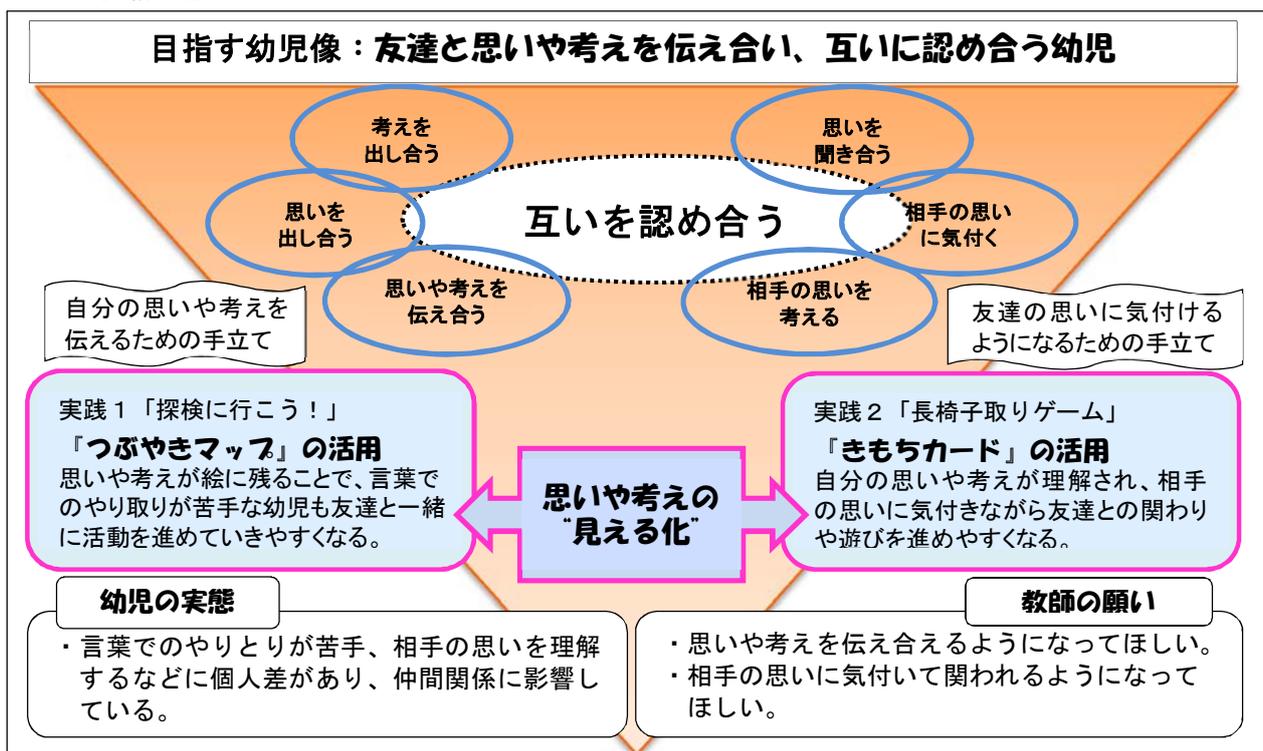
本園は、一村一校園である。そのため、本園で育んだ仲間関係が基盤となり、その後の関係作りにも大きく影響すると思われる。学級の幼児の実態を見ると、遊びや生活の中で新しい発見をした時や疑問に思ったことや、楽しさやおもしろさを感じた時などには、活発に伝え合う姿が見られる。その一方で、イメージや考えの違いから友達との遊びが続かず、その場を立ち去る姿や何も言えずに黙り込んで立ち尽くす姿も見られる。また、双方向的な言葉でのやりとりが難しく、仲直りの言葉を伝え合っても納得しきれずにもやもやした気持ちが残るなどの姿がある。言葉でのコミュニケーションが苦手であったり、言葉の意図が理解しにくかったりする幼児がいるなど、個人差があり、幼児同士の関係作りにも大きく影響している。

幼児が、自分の思いや考えを伝え合うためには、「相手に分かるように言葉で表現する」「相手の話に関心を持って聞いたり、理解したりする」ことが大切になる。そして、互いに自分の思いや考えを聞いてもらい、共感され、受け止めてもらいながら、相手の思いや考えに気付いたり、考えたりして共に活動する経験を重ねていく。

そこで、個人差がある全ての幼児が思いや考えを言葉で伝え合えるようになるためのきっかけとして、幼児の思いや考えを図や絵に描いたり、気持ちをイラストで表したりするなど援助を工夫していきたいと考えた。この思いや考えを “見える化” することを通して、幼児同士が思いや考えを伝え合いながら互いに認め合うようになるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 保育改善に向けた手立て

(1) 実践1における手立て

「友達と思いや考えを伝え合って一緒に遊びを楽しもう！ー探検に行こう！ー」

○自分の思いや考えを伝えるための手立てとして『つぶやきマップ』を活用する(図1)。

○イメージや考えが異なる幼児が共通の目的を持ち、思いを出せない幼児も共に活動を進めていけるように、連想したことを描いたりイラストを貼ったりして、線をつないでいく『つぶやきマップ』を活用することで、自分の思いや考えを出せるようにする。

・幼児が『つぶやきマップ』をかく時には、一人一人の幼児が思いや考えを出しやすいように、少人数のグループに分けて行う。

・幼児が新しい考えを思い付いた時やかきたい時に、いつでもかき足していけるよう『つぶやきマップ』を室内に掲示する。

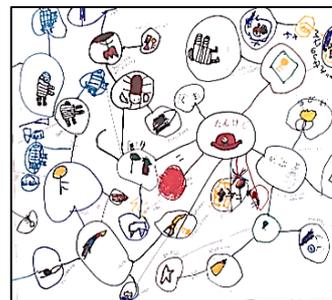


図1 『つぶやきマップ』

(2) 実践2における手立て

「友達と思いや考えを伝え合って一緒に遊びを楽しもう！ー長椅子取りゲームー」

○友達の違いに気付くようになるための手立てとして『きもちカード』を活用する(図2)。

○自分の気持ち以外にも、いろいろな気持ちがあることを知り、友達の違いにも関心をもってほしい場面や、言葉で気持ちを伝えられない友達の違いを考えながら関わってほしい場面で『きもちカード』を用いることで、自分の思いや考えが受け入れられたり、相手の違いに気付いたりしながら、友達との遊びを進めていけるようにする。

・ゲームを行う中で、幼児が友達の違いを考える時に『きもちカード』を使えるよう、幼児の手の届く場所に置く。

・友達とルールや遊び方を確認したり相談したりできるように「作戦タイム」を設定し、相手の気持ちも考えながら進めていけるように『きもちカード』を活用する。



図2 『きもちカード』

III 研究のまとめ

1 成果

○『つぶやきマップ』のように、自分の思いや考えを出せるようになるための“見える化”は、それぞれの幼児が出し合った思いや考えが絵に残ることで、思いや考えが目で見えて分かりやすくなったため、どの幼児も自分の思いを伝えやすくなったり、友達の違いにも気づきやすくなったりした。また、見直したりかき足したりすることができるので、幼児同士で思いや考えを確認しながら話し合いを継続することができた。

○『きもちカード』のように、相手の違いに気付いて関われるようになるための“見える化”は、友達の多様な思いや考えに触れることができ、そのことにより、いろいろな気持ちについて理解する姿が増えた。また、相手の立場になって考えたり、相手の言葉を聞こうとしたりして友達に感心を寄せながら関わるようになり、互いを認め合うことにつながった。

2 課題

○幼児の発達段階に応じて、思いや考えを“見える化”した方が良い場面と、音声言語での伝え合いの方が良い場面を明らかにし、幼児の実態やその場の状況に合った取り入れ方を検討していく。

＜授業実践＞

実践 1

1 単元名 「友達と思いや考えを伝え合って一緒に楽しもう！ー探検に行こう！ー」（5歳児）

2 本単元及び本時について

本学級の幼児は、5月中旬より、3歳児のお世話をしてあげたいという共通の思いを持ち、給食や着替えの手伝いをしている。幼児同士で3歳児のお世話について思いや考えを出し合ったことを、教師が絵や線でつなげ、『つぶやきマップ』を作った。幼児はこの『つぶやきマップ』を見て、事前にお世話の内容を確認し合い、協力し、楽しく3歳児のお世話をする活動に取り組むことができた。

5月下旬に数人の幼児が紙の真ん中に幼稚園の絵と周辺の様子を描いて探検の地図を作り、「宝物は、ここにあることにする？」などと話し合いながら遊ぶ姿が見られた。その遊びに参加する幼児が増え、探検の地図作りを楽しんでいた。その後、探検の地図作りの初めから関わっていた数名の男児が、探検に行きたい思いをクラスみんなに伝えたことがきっかけで、クラス全員で探検に行くことになった。

この活動を本時とし、その中で思いや考えを絵で表したり、線をつないだりする『つぶやきマップ』を幼児同士が関わって作ることで、自分の思いや考えを出して受け入れてもらったり、友達のことを聞いて自分とは違う考えに気付いたりして話し合い、一緒に活動を進めていく過程を楽しんでほしいと考えた。

3 保育の実際

事前の活動で、好きな幼児同士で7人組のグループを作り、グループの名前を決めるように伝えた。グループ1は、おとなしいA児が「みんなで探検に行きたい」と発表した姿を見て探検に興味を持った幼児が集まった。グループ2は、自分の思いを素直に言葉にする幼児が多く、なかなかグループ名が決まらず相談が続いていた。その中でB児は、友達に気持ちを伝えることが苦手で遊びやクラスの活動の中で不安そうにすることがあったが、グループ名が決まると探検の話合いを楽しみにしていた。

本時は、始めに教師が、グループでどんな探検をしたいのか話し合っ『つぶやきマップ』をかくことを説明した。幼児は探検について思い付いたことを口々に話し『つぶやきマップ』をかき始めた。

探検についての話合い（グループ1の事例）

A児と周りの幼児の姿（A…A児 他1～4…他児 T…教師）

○幼児は、探検の準備の話合いを始めた。

他1：「ねえ、宝は何にする？ここには何の宝があることにする？」

他2：「お花を宝にしたい。ここにお花があることにしようよ。何のお花にする？」

他3：「じゃあ、お花はバラね。そこにも違う宝があるのはどう？」

他4：「いいね！誰かバラ描ける？バラの描き方を聞いてみる？」（図3）

○教師は幼児にバラが描いてある本やイラストを渡し、話合いが進むよう

に援助をした。A児は、他児が話し合う様子を笑顔で見つめていた。

T：「A君も宝を探したいって言ったよ。A君の話も聞いてね」と他児に伝えた。

他1：「A君、どうする？」とA児の考えを聞いた。

A：「宝は、剣がいい。（剣を描く）だから、バラと剣を線でつなげて！」

他2：「分かった」と、納得してA児の考えを気持ちよく受け入れた。

A：「熊が出たら、この剣で助けてあげる」（剣と熊の絵を線でつなぐ）（図4）

T：「なるほど。いろいろな考えがあるね」と考えを出し合う姿に共感した。



図3 バラの描き方を相談する姿



図4 思いや考えを絵に描く姿

【教師の見取り】

- ・ A児が事前に話した「探検に行くと宝がある。宝を探すために探検に行く」という考えにグループの幼児が共感し、『つぶやきマップ』を通して、その目的を共有してグループのそれぞれの幼児が探したい宝について話し出していた。
- ・ 『つぶやきマップ』をかく中で、A児は、友達に自分の思いを聞いてもらう嬉しさを感じ、自分の思いや考えを出しやすくなった。他児は、A児の思いや考えを知り、一緒に考え合う楽しさを感じていた。

<事後の活動>

室内に掲示した『つぶやきマップ』を見て、A児と他1が教師に「また続きがやりたい」と話し、自分たちで『つぶやきマップ』を取ると、グループの仲間も集まり、続きをかき始めた。その姿を見た他のグループの幼児も友達に声を掛け、集まった友達同士で思いや考えを出し合う姿が見られた。

<その後の変容>

A児は、他児に慕われたり誘われたりして遊ぶことが多くなり、その仲間の中で自分がしてみたい遊び方や思いを友達にしっかりと伝える姿が見られるようになった。A児のように自分が考えた遊びをみんなに紹介したいという幼児も増え、紹介し合って一緒に遊び、楽しんでいた。

探検の準備の話合い（グループ2の事例）

B児と周りの幼児の姿（B…B児 他5～6…他児 T…教師）

○B児は、グループの友達の中で自分の思いを話せないでいたが、他5の「ここには毒があるからドクロを描きたい」という言葉を聞き、「ドクロ？ドクロ、知ってる！」と言いながら明るい表情を見せた。

T：「Bちゃん、ドクロが描いてある本があったよね？」

B：「うん。怪談レストランでしょ？」（本を探して持ってくる）

○B児がドクロのイラストを『つぶやきマップ』に描こうとすると、他5に

「僕がドクロを描くから！線でつないで！」と言われ戸惑ってしまった。

T：「Bちゃんも一緒にドクロ描く？」とB児の思いを引き出す言葉を掛けた。

B：「描きたい…。う～ん」と考え込むような仕草をして描き出せずにいた。

他6：「この場所にBちゃんも一緒に行こうよ。一緒に自分の顔を描こう！」

T：「Bちゃん、他6ちゃんがこの場所に一緒に行きたいって。誘ってくれているよ」と言葉を掛けた。

○B児は他6の言葉で安心した表情を見せ、自分の顔を他6の描いた顔の隣りに描き始めた（図5）。

他6：「先生、Bちゃんの描いた顔笑ってる。上手なんだね」と驚きながら教師や他児に知らせた。

T：「本当に上手ね。Bちゃん、楽しそう」と他6に共感し、他5にB児が絵に描いた思いを知らせた。

他5：B児の絵を見て「可愛いね。じゃ、（探検では）ドクロの毒からBちゃんを僕が守る」と言った。



図5 思いや考えを出す姿

【教師の見取り】

- ・B児は、思いをはっきり伝えられる友達の前で遠慮をして自分の思いを話し出せないでいたが、『つぶやきマップ』にかいたことが、言葉で自分の思いを友達に伝えるきっかけとなった。
- ・B児はドクロを描きたいという思いを言葉に出したり、他6に声を掛けられ一緒に描いたりし、楽しい様子であった。他5や他6もその絵を見て、「友達と探検に行ってみよう」というB児の思いを感じ取ったと思われる。言葉を絵や図にすることは幼児にとって相手の思いを知る上で有効であった。

<事後の活動>

B児は、友達と『つぶやきマップ』の続きをかき始めた。本時と同じく教師が他児にB児の様子を知らせながら一緒に行くことで、B児は自分の思いを絵に描き、嬉しそうに話合いに参加する姿があった。

<その後の変容>

B児は、友達が遊んでいると「何してるの？」と自分から言葉を掛けるようになった。リレーの作戦会議では、自分から思いついた作戦を話して絵や文字を『つぶやきマップ』にかき込み、「私が考えたの」と誇らしげにしていた。友達に「後はどうする？何をつなげる？」と聞いたりしていた。

4 考察

- 『つぶやきマップ』は、絵を描く、イラストを貼るなどして作ることで、幼児が自分に合った方法で取り組んでいた。また、幼児が探検について連想したことを絵などで表し、線でつないでいけるので、自分の思いや考えを出しやすかったのではないかと考える。しかし、思いや考えをはっきり伝えられる幼児が進める場面もあり、今後は、活動に応じて個性や仲間関係を考慮してグループ分けをしたり、友達の思いや考えを聞いて話し合えるようにするための手立てを講じたりすることが必要である。
- 『つぶやきマップ』は、後から見直してかき加えることができるので、幼児同士が互いに思いや考えを確認し合いながら継続して探検についての話合いを進めていくことができたと考える。

実践 2

1 単元名「友達と思いや考えを伝え合って一緒に楽しもう！ー長椅子取りゲームー」（5歳児）

2 本単元及び本時について

1学期は、グループや学級での話し合いの場面で『つぶやきマップ』を教師が作って活用したことで、幼児は友達との活動の中で自分の思いが出せるようになってきた。2学期は、友達との活動の中で幼児が体験した多様な気持ちを言葉で伝え合ったり、相手の思いに気付いたりできるような援助が必要であると考え、気持ちをイラスト化した『きもちカード』を用いることにした。初めに教師が12種類の『きもちカード』を作り、その後、幼児が友達との関わりの中で体験した気持ちをもとに新たなカードを加えたり、用いる頻度が減ったカードを除いたりして活用することで、多様な気持ちを学級全体で共有してきた。

今回友達と協力することが必要な「長椅子取りゲーム」の中で『きもちカード』を用い、チームでの話し合いや学級での集団遊びを楽しめるようにしていきたいと考えた。

3 保育の実際

C児は、事前に行った集団遊びの中で、負けることを避けてルールや勝敗のある遊びを楽しめないこともあり、C児の姿に困った友達がその思いを伝え、遊びから抜けてしまうことがあった。D児は、ルールを守って遊ぶ楽しさを友達と共有したい思いがあり、遊びが中断すると涙ぐんだり悔しそうな表情を浮かべたりして我慢し、思いきり楽しむことができないことがあった。

本時の長椅子とりゲームでは、個性の似ている幼児同士が2～3人のチームになるように教師が組み分け、思いや考えを友達と共感し合えるように1回戦後に作戦タイムを入れて配慮し、2回戦行った。

長椅子取りゲーム（C児のチームに関わっている場面）

C児と周りの幼児の姿（C…C児 他7～8…他児 T…教師）

○〈1回戦〉C児は長椅子に早く座りたくて友達の手を離してしまい手をつなぐというルールが守れなかったため、他7と一緒に長椅子に座れなかった。

C：「手をつながないとダメ？一人の方が楽しい」と教師に自分の思いを話した。

T：「そう…。C君はそう言ってるけど、他7君はどう思う？」

他7：「手をつながない方が楽しい」と話し、悔しそうな表情をした。

○〈作戦タイム〉C児は他7の言葉を聞かずに遊び出してしまった。

他7：「C君と一緒に考えてくれない」と困った表情をして教師に思いを話した。

T：C児に他7の表情を見て気持ちに気付くように「もやもやしてるのかな？ どう思う？」と言葉を掛け、『きもちカード』を思い起こさせた（図6）。

C：「…怒ってると思う」と、少し考えてから話した。

他7：C児の言葉を聞いて「じゃあさ…。どうする？」と、C児に自分の考えを話し始めた。

C：他7の言葉を聞き「いいこと考えた。約束を守って走るのはどう？」と話した。

○〈2回戦〉C児は長椅子に座れなかったが、納得して応援席に座った。

他8：同じように座れなかった他8が泣き出した。

T：「他8ちゃん、今どんな気持ちかな」と、C児や周りの幼児に尋ねた。

C：3種類の『きもちカード』を持って他8の側に来て、「めそめその顔。泣いてるけど悲しいの？ちょっと違う気持ちも混ざってるかな？」と話した（図7）。



図6 作戦タイムの様子



図7 気持ちを聞く様子

【教師の見取り】

C児は、他8が泣いているのは単に悲しいからでなく、思いどおりにならないもどかしさや悔しさを感じているのではないかと考え、3種類の絵カードを用いて、他8の気持ちになって考えようとしていたのではないかと捉えた。

<事後の活動>

C児は気持ちが落ち込んでいる他8に、にこにこ(=楽しい)のカードを見せながら「にこにこの笑顔を思い出せばいいと思う」と言い、気持ちの立て直し方を知らせていた。

<その後の変容>

発表会の話合いで自分の気持ちばかり言うC児に、「じゃ、みんなと一緒にしないの？いらいらしちゃうよ。どうしたいの？」と怒ったように言う友達の表情をじっと見て、「みんなと一緒にしたい。何をしたらいい？」と言い、話合いに参加した。友達の言った“いらいら”という言葉で『きもちカード』を思い出し、相手の表情をよく見てその気持ちに気付き、自分の気持ちを切り替えて関わる事ができた。

長椅子取りゲーム（D児のチームに関わっている場面） D児と周りの幼児の姿（D…D児 他8～10…他児 T…教師）

○〈1回戦〉他チームが約束を守らなかったことで、自分が座れず不満そうなD児が「悔しい」と思いを話せる場を設けた。また、手をつないでいた他9も同じ思いでいることにD児が気付けるよう声を掛けた（図8）。



図8 気持ちを話す姿

○〈作戦タイム〉教師は、D児を含めた他の幼児が、同じチームの友達と協力してゲームができるように、互いに思いや考えを話し合う環境を作った。

D：「他9ちゃんの手が離れそうになっても、手を引っ張ってあげる。そういう約束にしない？」など、他9の思いを聞きながら相談し合っていた。

T：「いい約束が考えられたね」と二人の相談し合う姿に共感した。

○〈2回戦〉D児は3度目で座れなかったが、「頑張ったね」「残念だったね」という友達の言葉を聞き、1回戦よりも明るい表情で応援席へ移動した。

D：応援席の幼児と一緒に友達を応援しながらゲームの様子を見て、どのチームが先に座れたか確認して教師や友達に伝えた（図9）。



図9 先に座ったチームを確認する姿

○他8が座れなくて泣き出した。

D：「泣いてるけど、どうしたの？」と、他8に駆け寄って来た。

他8：「他10君みたいに、勝ちたかった」と悔しそうに言った。

D：「悔しかったね。すぐ、にこにこになれなくていいよ」と言った。

T：D児以外にも、パネルに貼ってある『きもちカード』を見て、他8の気持ちを考えたり、気持ちを立て直せないことに共感したりする幼児の姿が見られ（図10）、友達の気持ちを考えて関わろうとする姿を認めた。



図10 気持ちに共感する姿

【教師の見取り】

- ・D児の「すぐ、にこにこになれなくていいよ」の言葉から、他8と同じような思いを体験したことで、他8の気持ちに寄り添うことができたのではないかと考えた。
- ・『きもちカード』を用いて考え合う数人の幼児の姿から、泣いていて言葉にならない他8の思いを汲み取り、『きもちカード』を用いて他8の思いを聞き出そうとしているのではないかと捉えた。

<事後の活動>

当番活動の中で、当番のD児が体験したことを発表した。「他8に優しくする友達を見て、心がほかほかした」「他8が元気になって、自分も嬉しくてにこにこした」など、気持ちを話す姿があった。

<その後の変容>

D児は、なかなか言い出せない苛立ちや悔しさなど、我慢して伝えられなかった気持ちも言葉にし、相手に理解してもらった場面が増えた。友達同士の思いがすれ違う場面では、『きもちカード』を用いて友達の思いを聞き、確かめ、互いに話し合えるようにD児が仲立ちしていろいろな思いに気付く姿があった。

4 考察

- たくさんの『きもちカード』の中から1つ、または2つ以上のカードを手に取り、自分とは違う友達の気持ちを考え、理解しようとする幼児の姿が見られた。自分の気持ちを言葉で伝えられなかったり、友達の気持ちに気付けなかったりする幼児に対して、周りの幼児が『きもちカード』を用いて思いを聞き、考えながら言葉を掛ける姿があり、友達の思いに気付いて関わる上で有効であった。
- 今後は、『きもちカード』を用いて友達の気持ちを理解できるようになった体験を土台に、どの幼児も『きもちカード』に頼らずに思いや考えを言葉で伝え合えるようにしていくことが課題である。